

第3 問題作成部会の見解

日 本 史 A

1 問題作成の方針

試験問題の作成に当たっては、これまで高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に準拠し、高等学校で使用する教科書を基礎としてきたが、今年度もこの方針を踏襲して問題作成することにした。

- (1) 問題数は、大問5問とした。第1問は、「学習指導要領」に対応して、主題学習に即した問題とし、第2問・第4問は、「日本史B」の第5問・第6問と共通問題とした。
- (2) 設問数は、平成28年度試験以来、34問から32問に減らして、受験者の負担を軽くしてあるが、本年度もそれを踏襲し、32問とした。内訳は、主題学習の第1問が計6問、幕末維新期の第2問が計4問、近現代史の第3問～第5問が計22問とした。
- (3) 高等学校教科書の主題学習に配慮し、第1問は「妖怪」を題材に近代から現代にかけての社会情勢に関連する出題とした。
- (4) 国際的視野を反映させた出題となるよう、全体的に心掛けた。
- (5) 政治史・経済史・文化史・対外関係史などの各分野から出題し、バランスを取るよう心掛けた。
- (6) 文字資料・図版資料・地図・表・グラフを用いて、歴史事象とともに考えさせる問題作成を心掛けた。
- (7) リード文と設問との関連性、下線部と設問との関連性に留意した。
- (8) 試験時間60分で解答できる問題になるよう留意した。
- (9) 前年度に引き続き年代配列は6択としたが、難度が高くなり過ぎないように配慮した。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 妖怪という、受験者にとって親しみやすいテーマに関するリード文を手がかりに、近現代の政治・外交・文化・社会に関する基礎的な事項の理解を問うた。「学習指導要領」は「身近な生活文化（中略）などに関わる主題を設定し追究する学習を通して、歴史への関心を高めるとともに、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」ことを求めているが、この内容に即し、「現代に残る風習や民間信仰が本来どのような意味を持ち、それがどのように変化してきたかを現代の人々の生活と関連付けて追究させる」こと、「産業技術の発達が（中略）人々の日常生活にどのような影響をもたらしたかを追究させる」こと、「生活意識や価値観の変化に着目して（中略）技術革新と高度成長（中略）について考察させる」ことを具体的に展開した。史料や図版から歴史像を多角的に考察させようとしたが、分野を混合させた問題であり、かつ選択肢をじっくり読むことが必要だったため、やや難易度が高かったという評価を教育研究団体から受けた。

問1 明治期の学者・思想家の事績や、学者・思想家が結成した団体について、空欄補充形式で出題した。リード文を丁寧に読むことで対応できる問題であり、比較的高い正答率を得た。

問2 岸信介をはじめ、その前後の内閣に関わる事績から年代整序の形式で問うた。

問3 「妖怪」という語を含む史料の読解を通じ、昭和戦前期の政治・外交に関する理解を正

誤判定形式で問うた。日本史だけでなく、世界史と関連付けた史料の読解力を問う良い問題であったとの評価を得た。

問4 漫画・アニメに描かれた妖怪の図像が指し示す内容を読み取った上で、それと関わる戦後の経済や社会の変化について正誤判定形式で出題した。図像の印象に目を奪われるが、経済に関わる選択肢の文章を正確に読解できるかどうかで出来不出来の差が分かれた。受験者にはやや難しかったようである。

問5 戦後の公害・環境問題に関する歴史的事実の理解を、正誤判定形式で問うた。環境庁の設置と公害対策基本法制定の順序の判定が難しかったようである。

問6 日本の科学研究の発達についての基礎的事実を、学者名とその事績とを組み合わせる問題形式で問うた。

第2問 幕末維新期の大坂（大阪）に関する歴史事象をリード文で与え、そこで述べられた政治経済状況から、明治維新の多様な側面について、「学習指導要領」を踏まえた基本的な事項を問うた。大問としての得点率は平均以上であったので、当初の狙いは達成できたと考える。なお、本問は「日本史B」第5問との共通問題である。

問1 幕末から明治維新にかけての将軍・天皇名を問う基本的な空欄補充問題である。徳川家定と徳川家茂との判別に迷ったとの指摘を受けた。「日本史A」の問題としては、家定は将軍継嗣問題で登場するという理解を前提に選択肢を設定してもよかったかもしれない。

問2 慶応期の代表的民衆運動である、世直し騒動とええじゃないかの様子について問う正文選択問題である。民衆運動についての理解度が一般に高いことがうかがえる結果となった。

問3 幕末維新期の政治家として知られる大久保利通の事績について問う、基本的な正文選択問題である。同期の政治史は人物の出入りも複雑なので、出題は分かりやすさを心掛け、その旨評価する意見もあったが、さらに設問の仕方に工夫の余地があるという意見も受けた。

問4 明治期の経済の近代化・資本主義化を、それを推進した経済人（政商）の事績として問う、誤文選択問題である。経済事象を人物を通して理解することが少ないことを配慮した設問との評価もあったが、正答率は他の小問と比して低く、今後の課題としたい。

第3問 明治維新期の政治家三島通庸の活動を説明したリード文に関連付けて、明治期の殖産興業、特に土木・建築事業の展開、関連して自由民権運動・条約改正などの政治問題を問うた。絵画を写真で問うたのも特徴であった。明治維新期の基礎的知識を問うもので全体の正答率は4割程度であった。リード文Aは三島の出自から山形県令となってからの活動、特に近代洋風街造りについて述べた。リード文Bは三島の福島県令以後の活動と、東京での洋風官庁街建設への意欲と条約改正の動きを述べた。

問1 薩摩藩士三島の中央政界への登場と、東京銀座の洋風町造りを問う空欄補充問題として出題した。比較的容易な問題で、受験者のほぼ半数が正答した。

問2 明治期の殖産興業政策を問う基本問題、正文選択問題で問うた。やや難問との指摘もあったが、正答率は平均的な水準であり、特段の難問とは思えない。

問3 三島は、洋風街の成果を画家高橋由一に描かせたが、その高橋の著名な作品を問う選択問題であった。単純な問いで難易度を計りかねたが、高校教員からは苦手な文化問題をシンプルな形態で出題した良問と好評であった。キャプションがあればより分かりやすいとの指摘があるので検討したい。

問4 三島の東京での治安活動・洋風建築について基本的事項を空欄補充で問うた。これは易しい問題であった。リード文の読み取りが必要な良問との評価を受けた。

問5 自由民権運動の過激事件である加波山事件について、正誤文の組み合わせで問うた。こ

の問題は難問であつたらしく正答率は比較的lowかった。

問6 条約改正について、担当大臣と基本的な流れを、三つの文章の年代整序で出題した。「日本史A」では唯一の対外関係を問う問題であつた。問いは必ず教科書に出ている基本的なものであつたが、成績上位層と下位層での正答率の差が大きい結果となつた。

第4問 「近現代の公園」に関するリード文を掲げ、当該期の政治・文化・社会・経済の基本知識を問う問題である。なお、本問は「日本史B」第6問との共通問題である。

問1 近代における国内政治と事件についての理解度を確認するため、空欄補充形式で出題した。正答率も高く、よくできていた。

問2 日比谷公会堂で開催された催事に関する新聞記事と広告を掲載しながら、歴史上の重大事件の前後関係を問うた。年代整序は難問に分類されるが、おおよそよくできている。

問3 近代日本の要人殺害事件について基本的な内容を問うた。正答率も高く、よくできていた。

問4 近代の産業革命以後の工業化の動向について、基本的な知識を問うた。鉄鉱石供給の場所と石炭供給の場所を誤認している受験者が多かつた。

問5 明治期の出版・文化について記した内容を問うた。正答率が低かつたが、文化についても確実に理解してほしいところである。

問6 近代における米の生産量と耕地面積の関係を表から検討する問題である。XY正誤のうち、Xを正と解答した受験者の比率は高く、表の理解はできている。農業協同組合（農協）は知っていてほしい語句である。

問7 戦時期から戦後の動向について理解を問うた。「国体」「治安維持法」の内容について正確な知識を問うた難問だつたが、正答率が高く、よくできていた。

問8 長州藩出身者が組織した内閣について、前後関係を問うた。年代整序は難問に分類されているが正答率も高く、よくできていた。

第5問 昭和戦前期から安定成長期にかけての経済政策や、経済・社会に対する国民の意見・要望を通観し、この時期における経済動向、国民生活の状態及び価値観の変化について、「指導要領」の目標・内容に即した基本的な知識を問うことを狙いとしたりした。

問1 プロレタリア文学や社会科学研究についての基礎的な知識を問う問題である。正確な知識が求められるため、正答率はやや低かつた。

問2 井上準之助の金解禁政策についての基礎的な理解と史料の読取りを問う問題である。史料の読解力や思考力が問われる設問だが、正答率は高かつた。

問3 戦時期及び占領期の経済政策と国民の生活について基礎的な知識を問う問題である。標準的な正答率であつた。

問4 戦後の平和運動に関する基礎的な知識を問う問題であるが、地理的な知識が不足している受験者には苦手な地図形式であつたため、正答率が低かつた。

問5 戦後の労働組合運動に関する基礎的な知識を問う問題である。正答率は標準的であり、識別力も高かつた。

問6 1970年代前半の田中角栄内閣期の経済状況について、基礎的な知識を問う問題である。リード文から判別が容易であつたため、正答率は高かつた。

問7 戦前から戦後にかけての大都市部での生活の変化について、基礎的な知識を問う問題である。「ニュータウン」「地下鉄」の時期の判断が難しかつたようであり、正答率は低かつた。

問8 高度成長期の財政政策の変化に関して、リード文やグラフの読取りを問う総合的な問題である。グラフ形式であることに加えて、消費税導入の時期に関する正確な知識が求められるため、正答率はやや低かつた。

3 出題に対する反響・意見についての見解

今年度の「日本史A」の平均点は、37.47点で、昨年度の40.81点より3.34点下がり、過去最低点を記録してしまった。ただし、「日本史B」の平均点59.29点との格差は、21.82点で、昨年度の24.74点に比べて縮小した。

高校教員からは、昨年度よりも難化したとの指摘があったが、共通問題については易化が指摘されており、「日本史A」のみの問題の難易度指数の上昇により、平均点が下降したとの考えが寄せられている。一方、教育研究団体からは、平均点が下がった要因として、逆に「日本史B」との共通問題の難易度が上がったことが指摘された。

高校教員からは、新課程の趣旨をいかそうとする意図が見られる出題であり、全体的に適切な出題であったという評価を受けたが、難易度になお一層の配慮を求める意見が付された。教育研究団体からは、リード文や選択肢の内容が難しく、内容の読み取りの段階から受験者の高い思考力・判断力が必要であったことが、平均点を下げる要因になったと考えられるという指摘を受けた。

また、教育研究団体からは、単なる知識にとどまらない出題の工夫がなされ、受験者が難しいと感じる、正誤の組合せ問題や年代配列問題を減らし、平均点を上げる配慮がなされているという評価もを受けたが、併せて、「日本史A」と「日本史B」では、設置の趣旨が異なるので、共通問題はやめ、独自問題の作成を検討する必要があるのではないかとの指摘もを受けた。

共通問題については、無理なことではないと考えているが、受験者が問題の内容を理解しやすいような表現を行うことにより一層留意し、今後も良問を作成するよう、努力を続けたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点

本部会は、問題作成上の留意点として以下の4点を挙げてきた。

- (1) 高等学校教育の範囲と水準を逸脱することなく、平均点を上げるため、標準的な問題を作成するように一層心掛ける。
- (2) 高校現場での授業に配慮する。
- (3) 問題領域や設問形式のバランスや文字資料・地図・表・グラフの適切な使用に留意しつつ、「歴史的思考力」を問う問題を多く出題するように工夫する。
- (4) 「日本史B」との共通問題の難易度について更に配慮する。

今後もこれらの諸点に一層留意するとともに、難度が上がったと評価された点があるので、今回御指摘を受けたことを踏まえて、問題作成を行いたい。

日本史 B

1 問題作成の方針

試験問題は、これまで高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に準拠し、高等学校で使用する教科書を基礎として作成することとしてきたが、今年度も、この方針を踏襲して作問することにした。

- (1) 問題数は、大問6問とした。第1問は、「学習指導要領」に対応して、主題学習に即した問題、第2問は原始・古代、第3問は中世、第4問は近世、第5問・第6問は近現代とした。第5問、第6問は「日本史A」第2問・第4問と共通問題とした。
- (2) 前年度までの方針を引き継ぎ、設問数は36問とし、主題学習6問、前近代18問、近現代12問とした。
- (3) 国際的視野を反映させた出題となるよう心掛けた。
- (4) 高等学校教科書の主題学習に配慮し、第1問は「地域と歴史」を主眼とする出題とした。
- (5) 政治史・経済史・文化史・対外関係史などの各分野から出題し、バランスをとるよう心掛けた。
- (6) 文字資料・図版資料・地図・表を用いて、総合的に考えさせる作問に心掛けた。
- (7) リード文と設問との関連性、下線部と設問との関連性に留意した。
- (8) 試験時間60分で解答できる問題になるよう留意した。
- (9) 前年度に引き続き年代配列は6択としたが、難度が高くなり過ぎないように配慮した。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 訪れた先で見学した歴史史跡・遺物をテーマにした手紙スタイルのリード文を掲げ、古代から現代の国際環境・政治・文化・社会の基本知識を問う問題である。リード文は対外的な視点を持つ文章とし、また、訪問先の地域・地理的な特徴を記すことから、設問との関係を示し、発信する情報の豊富さと多様性に注意が向くように留意して、「学習指導要領」の趣旨に適合するよう工夫した。特にリード文は「歴史的思考力」を培うことの重要性を喚起するメッセージ、との評価を得た。

問1 中世・近世の国際環境と国内政治の関連の理解度を測るため、基本的事項を空欄補充形式で出題した。空欄は近世のオランダ・フランス商館の設置箇所と、中世の高麗国・琉球の勢力と日本との理解を問うた。基本的な問題との評価を得たが、教科書での記載が国内の政治動向とは別枠で記されていることとも関係するのか、選択肢は正誤関係なく、まんべんなく選ばれており、予想より正答率は低かった。これは勘違い等の誤答ではなく受験者の理解の低さを物語る結果と考える。

問2 前近代の「瀬戸内」の地域社会についての理解度を測るため、縄文時代から江戸時代を通史的に見る形の正文選択で出題した。「学習指導要領」にある「時代ごとに区切らない主題を設定し」に適應するような設問とした。これについては標準的もしくは良問との評価を得、また正答率も想定どおりとなった。

問3 前近代の中国との文化交流についての理解度を測るため、正誤判定形式で出題した。古代と近世の人的・文化的な流入の内容を問うたが、ほぼ想定内の正答率となった。

問4 史跡の地理的な理解度を測るため、地図を用いて該当地域を特定する形式で出題した。単なる言葉の暗記では解けない問題であり、意欲的な問題との評価を得た。また、受験者の

理解度は高いようで、想定以上の正答率となった。

問5 近現代の日本海をめぐる国際環境の理解度を測るため、写真（ポスター・史料含む）を用いて、年代整序の形式で出題した。古代から近代までを俯瞰する視座を提供した上で、各時代の人々の生活を想起させる良問との評価を得た。なお、史料読解を含むことから、やや難問と指摘されたが、確かに正答率は想定より低い結果となった。今後の作問に当たっては留意したい。

問6 リード文のテーマでもある情報伝達や移動の手段の、全時代を通じての理解度を測るため、誤文選択形式で出題した。誤文が紛らわしく、本質的理解を問うものとは考えがたいとの指摘は重要であり、今後の作問に反映していきたい。ただ、正答率は想定より高い結果となった。

第2問 古代の政治・社会と思想・信仰に関する知識・理解を問うことを狙いとし、東アジアとの関係も踏まえながら思想・信仰の展開とその背景に関するリード文を作成した。リード文Aではいわゆる仏教公伝から律令国家成立期頃までの国際関係と国内社会における仏教の浸透過程を、リード文Bでは怨霊への対応等で期待が集まった仏教の展開とその背景を中心に据えた。設問は幅広い内容を含むものとし、形式も多様なものとなるよう心掛けた。

問1 6世紀から7世紀にかけての諸豪族と、律令国家成立期における地方制度に関する理解を、空欄補充形式で出題した。

問2 7世紀後半の諸政策についての知識・理解を正誤選択形式で出題した。律令国家成立前後の支配の在り方に関する基本事項であり、正答率も高かった。

問3 古代における東アジア諸国との関係を考える上で重要な、外交・文化に関する理解を、正文組合せ形式として出題した。律令国家の発展にも関わる文化・技術への基本的知識を求めるものであり、正答率は高かった。

問4 8世紀から9世紀に発生した政争について、基本的な理解を問うた。年代配列問題として出題したこともあり、正答率は低めであった。

問5 平安時代における浄土信仰の展開とその背景に関して、正誤判定形式の問題として出題した。文化史の用語の正確な理解を基にした思考力を問うている。

問6 平安時代の地方支配に関する理解を問うた。土地制度に関する設問で判定のための要素が多かったためか、正答率は低かった。

第3問 中世における武士の動向を中心に、鎌倉期から室町期に至るまでの政治・社会・文化に関する基本的な内容について、幅広く問うことを狙いとしている。リード文Aは南北朝時代にかけての政治・社会と戦争について説明し、将軍と御家人、武家と朝廷の関係に関する理解を問うている。また、リード文Bは室町時代、特に足利義満の時代を中心とした政治・経済・外交・文化について説明し、その理解を問うている。

問1 鎌倉幕府の政治と経済についての理解を問う問題で、正答判定形式として出題したが、正答率は5割に満たなかった。

問2 承久の乱と地頭についての理解を問う問題で、史料の読解を踏まえて正文組合せ形式で出題した。初見史料も含まれていたが、受験者は正しく情報を読み取っており、正答率は高かった。

問3 鎌倉時代・建武新政・南北朝時代の歴史過程についての理解を問うたものだが、年代配列問題として出題したためか、正答率は低めであった。

問4 室町幕府の政治に関する理解を問うている。基本的な事項について、空欄補充形式で出題した。

問5 室町時代の社会・経済に関する理解を問うており、正答率も高めであった。

問6 室町時代の外交・文化に関する理解を問うた。受験者の中には、明と朝鮮との外交の違いについて誤解している者も一定程度いたため、正答率は低めであった。

第4問 近世日本の文化・政治・社会について述べた文章を掲げ、江戸幕府の政策や近世経済・文化・思想についての基本的な知識を問うことを目的に作成した。リード文Aでは、近松門左衛門に関する説明から、近世の外交・文化・経済についての理解を問うた。リード文Bでは、18世紀末の社会状況や天皇・朝廷についての説明と、幕府の治安維持政策に関する史料により、近世後期の政治・思想に関する理解を問うた。

問1 17世紀後半の文学や東アジアの状況についての理解を問うた。元禄文化における文学作品や、明清交代についての基本的理解ができており、非常に高い正答率を得た。

問2 近世の上方の経済的機能についての理解を問うた。全国的な経済構造の中での上方の機能について基本的知識が習得できており、高い正答率を得た。

問3 元禄文化について、絵画・工芸品の写真を用いて理解を問うた。元禄文化における著名な人物・作品についての基本的理解ができており、高い正答率を得た。

問4 江戸幕府の寛政の改革や、18世紀後半の朝廷と幕府の関係についての理解を問うた。高い正答率を得ており、近世後期の幕政や朝幕関係の展開についておおむね理解されていると考える。

問5 江戸の打ちこわしの際の社会状況について、先手組に出された指示を読み解くことで答えさせる問題とした。受験者にとってはやや難度の高い史料であるとの指摘をうけたが、非常に高い正答率を得ており、史料を通して江戸幕府の治安維持について考えさせることができた。

問6 尊王攘夷思想の展開と、幕府の取り締まりについての理解を問うた。時代が近接している事項の年代配列を問うたため、やや正答率は低かったが、尊王思想について時代背景などを考察させた点は評価された。

第5問 幕末維新期の大阪（大阪、以下「大坂」）に関する歴史事象をリード文で与え、そこで述べられた政治経済状況から、明治維新の多様な側面について、「学習指導要領」を踏まえた基本的な事項を問うた。各問の正答率は全て5割を超えていたので、当初の狙いは達成できたと考える。一方で出題内容が基本的すぎるという意見もあり、「日本史A」「日本史B」共通問題の難易度については、一層注意深く設定していきたい。なお、本問は「日本史A」第2問との共通問題である。

問1 幕末から明治維新にかけての将軍・天皇名を問う基本的な空欄補充問題である。正答率も高く基本問題としての役割は果たした。

問2 慶応期の代表的民衆運動である、世直し騒動とええじゃないかの様子について問う正文選択問題である。民衆運動についての理解度が一般に高いことがうかがえる結果となった。

問3 幕末維新期の政治家として知られる大久保利通の事績について問う、基本的な正文選択問題である。政治史として標準的な設問であったことを正答率は示している。

問4 明治期の経済の近代化・資本主義化を、それを推進した経済人（政商）の事跡として問う、誤文選択問題である。政商についての標準的な設問であったことを正答率は示している。

第6問 「近現代の公園」に関するリード文を掲げ、近現代史における政治・文化・社会・経済の基本知識を問う問題である。なお、本問は「日本史A」第4問との共通問題である。

問1 近代における国内政治と事件についての理解度を確認するため、空欄補充形式で出題した。正答率も高くよくできていた。

問2 日比谷公会堂で開催された催事に関する新聞記事と広告を掲載しながら、歴史上の重大事件の前後関係を問うた。年代整序は難問に分類されるが、おおよそよくできている。

問3 近代日本の要人殺害事件について基本的な内容を問うた。正答率も高くよくできていた。

問4 近代の産業革命以後の工業化の動向について、基本的な知識を問うた。鉄鉱石供給の場所と石炭供給の場所を誤認している受験者が多かった。

問5 明治期の出版・文化について記した内容を問うた。正答率が低かったが、文化についても確実に理解してほしいところである。

問6 近代における米の生産量と耕地面積の関係を表から検討する問題である。XY正誤のうち、Xを正と解答した受験者の比率は高く、表の理解はできている。農業協同組合（農協）は知っていてほしい語句である。

問7 戦時期から戦後の動向について理解を問うた。「国体」「治安維持法」の内容について正確な知識を問うた難問だったが、正答率が高く、よくできていた。

問8 長州藩出身者が組織した内閣について、前後関係を問うた。年代整序は難問に分類されているが正答率も高く、よくできていた。

3 出題に対する反響・意見についての見解

今年度の「日本史B」の平均点は59.29点で、前年度より6.26点下降した。高校教員からは、他教科と比較しても教科間の得点差は最大6点であり、全体的に適切な難易度であったとの評を得た。教育研究団体からは、平均点が60点を割ったこと、世界史との差が昨年度と比べて大きく開いている点を重視し、平均点を上げる配慮を更に求める意見が寄せられた。

出題内容については、高校教員からは、「要求されていた知識は、各時代の特徴及び歴史的事象の推移・変化、あるいは背景を理解していれば正答を導くことができる適切な構成であった」と、また「一見難しそうに思える設問にも、リード文や設問文に正答を導くための配慮がなされていた」と、おおむね良好な評価をいただいた。教育研究団体からも、資料活用を重視する「指導要領」の趣旨がよく反映されており、歴史に対する新たな資格を受験者に提示しようとする意欲的なリード文がある一方、高等学校の学習内容との乖離が見られるリード文も見られたという指摘をいただいた。

次年度以降の作問に当たっては、指摘や要望を受けた点について十分配慮していきたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点

今年度の「日本史B」の平均点は僅かではあるが60点を切ってしまったが、標準的な問題を作成できたと判断している。今後もこの方向で作題を進めたい。本部会は従来からの作問上の留意点として以下の4点を挙げてきた。

- (1) 高等学校教育の範囲と水準を逸脱することなく、標準的な問題を作成するように心掛ける。
- (2) 高校現場での授業に配慮する。
- (3) 問題領域や設問形式のバランスや文字資料・図版資料・地図・表・グラフの適切な使用に留意しつつ、「歴史的思考力」を問う問題をより多く出題するような工夫する。
- (4) 「日本史A」との共通問題について、難易度に一層配慮する。

今後もこれらの点に一層留意し、また今回指摘いただいたことを踏まえ、問題作成を行いたい。